# 東奥日報2026年11月11日(水)付掲載

りんごの音符 28

## ビオラ　山本　周さん（神奈川県出身）

# 充実した2年目の音楽祭

8日に閉幕した「青い海と森の音楽祭」では、昨年に続いて素晴らしい音楽家たちと共演させていただき、どの公演も演奏していて本当に楽しかったです。今年は弦楽合奏の企画や弘前市民会館での公演など新しい試みも増えて、2年目にしてすごく充実してきた感覚があります。

青森の街の中でもたくさんチラシを見かけたり、食べに行ったお店の方とも音楽祭のことを話したり、朝に新聞を見れば前日の公演の記事が目に飛び込んで来たりと、すごく温かく良い雰囲気に包まれた音楽祭だと思います。残念ながら来年は日程の都合がつかず参加することはかないませんが、またぜひ青森の地に帰って来たいと思っています。

首席奏者を務めている「オーケストラ・アンサンブル金沢」も、音楽祭のオーケストラという小さな編成で、室内楽のようなオーケストラ、という意味で気に入っています。

3歳からバイオリンを始めましたが、高校で弦楽四重奏という室内楽に出合い、ビオラに出合ったことで自分が将来どんな音楽家になりたいか明確になった気がします。桐朋は室内楽を学ぶ環境が整っていて、セミナーでは同年代の人が何を考えて音楽をしているのか、普段の学校ではわからない部分を知ることができて、多くの刺激をもらいました。

ビオラは、弦楽四重奏のメンバーが小柄な女性だったので「僕が弾くよ」という適当な感じで始まったのですが（笑）。当時教えてもらっていたバイオリンの徳永二男先生がビオラを貸してくれて、プロも使えるようなしっかりとした楽器を最初から使えたのは自分にとって大きかった。そこからはまって、好きになっていきました。

ビオラという楽器は「人の声に近い」とよく言われ、メロディーを演奏しているときも自分が歌っているような感覚があります。ハーモニーを作るという仕事は決して目立つものではないのですが、音楽のカラーを決定的にする役割があります。メロディーよりも、意外にハーモニーの移り変わりに心を動かされる瞬間が多いと思います。

音楽を長く続けてきましたが、僕にとっては「弾くのが当たり前」という感覚が大きいです。例えば基礎練は退屈なものですが、僕は朝に1時間やるのが当たり前。習慣にして、やらないと自分の調子が悪い気がするという感覚まで地道にやることが大事です。

音楽家という道を歩んで来て、自分の将来がどうなるか分からない時期が多かったです。ただ自分は「何とかなる」というマインドで進んできました。短期的に「これを直して、あれを直して」と続けていくことが長い活動につながるのかな。「一つずつ何とかしていく」ことが大切だと思います。（まとめ・秋村有香）

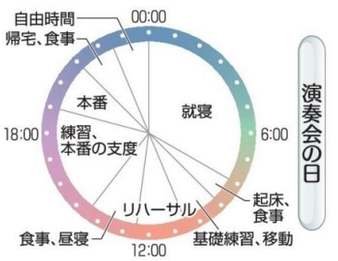


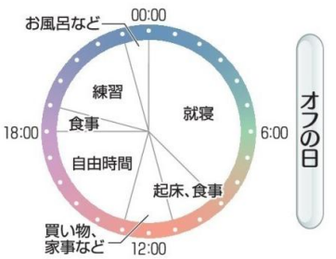
山本周さん



「青い海と森の音楽祭2026」のオーケストラコンサートで演奏する山本さん㊨＝6日、弘前市の弘前市民会館

〈やまもと・しゅう　1993年、神奈川県出身。桐朋女子高等学校音楽科（男女共学）、桐朋学園大学を経て同研究科修了。室内楽、オーケストラ奏者として国際音楽祭NIPPON、武生国際音楽祭、東京・春・音楽祭や宮崎国際音楽祭などに出演。また首席奏者として、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団などに客演。これまでにバイオリンを森川ちひろ、徳永二男、ビオラを佐々木亮、鈴木康浩の各氏に師事。またジェラール・コセ、ヴァルター・ケスナー、オリ・カム各氏の指導を受ける。サントリーホール室内楽アカデミー第4期～第6期フェロー〉




## 作曲家はこんな人

### ワーグナー

映画やゲームで流れるドラマチックな音楽。その「大迫力の演出術」を作ったのが、19世紀のドイツの作曲家ワーグナーです。ワーグナーは、音楽と演劇、美術、文学の統合を目指して作られた「楽劇」をつくりあげたことにより、「楽劇王」とも呼ばれています。

ワーグナーは、オペラのあり方を根本から変えた偉人で、物語と結びついた「示導動機（ライトモティーフ）」を張り巡らせ、巨大なオーケストラの響きによって人間の強い感情や「意志」を表現したことが彼の作品の大きな特徴です。

また、ワーグナーは音楽・演劇・美術をすべて一つに融合させた「総合芸術」を唱え、自らの作品だけを上演するための「バイロイト祝祭劇場」という専用の劇場まで建てました。暗闇の中で巨大な音に包み込まれる空間演出は、当時の市民社会を熱狂させ、音楽を社会の中心へと引っ張り出したのです。

楽劇『ニーベルングの指環』（4部作）は、ワーグナーが26年の歳月をかけて完成させた、上演に計15時間以上かかる超大作です。『ラインの黄金』『ワルキューレ』『ジークフリート』『神々の黄昏』の4部からなり、通常4日間かけて上演されます。神々、巨人、小人（ニーベルング族）、人間が世界の覇権をめぐって呪われた「指環」を奪い合う、壮大なファンタジーで、現代の『ロード・オブ・ザ・リング』などのファンタジー作品の原点とも言えます。『ワルキューレ』の中で奏でられる「ワルキューレの騎行」は、映画の突撃シーンなどで超有名なメロディです。

このようにワーグナーは「現代の映画音楽の父」であり、圧倒的な演出力を持つエンターテイナーと言えます。登場人物や特定の場面ごとに決まったメロディを流す「示導動機」の手法は、現代のサスペンスや映画のＢＧＭの基礎そのものです。

圧倒的な音のドラマで聴き手をのみ込み、現代のエンタメの礎を築いたワーグナー。その重厚な響きの扉を開けてみましょう。（県吹奏楽連盟監修）

2027年９月６～12日に第３回「青い海と森の音楽祭」が開かれます

無断での複製・転載・生成AI利用を禁じます。